

わらべうたあそびの教育的意義からの一考察  
—保育・教育課程と継承の関係性から—

野 口 知英代\*

**The Educational Significance of Playing with Nursery Rhymes**  
**—The Relationship between its effectiveness and the nursery school curriculum—**

Chieyo Noguchi\*

**Abstract**

This article deals with the educational significance of children's song play and its success in the training of childcare teachers in registered kindergartens. An earlier study revealed children's songs were a superior teaching material that promoted the development of the infant. This is recognized by caregivers in childcare settings. However, the reality is that this is not accomplished systematically.

In order to halt the decline in use of children's songs in actual childcare situations, the author suggests that children's songs should be planned as an important part of the curriculum and training should be given in their use. Such curriculum planning has the aim of improving the quality of childcare.

**キーワード**

わらべうたあそび、保育教諭、教育・保育課程、継承、研修

1. はじめに

教育課程審議会答申（1998年）で「教育においては、どんなに社会が変化しようとも時代を超えて変わらない価値あるものを子どもたちがしっかりと身に付ける必要がある。」と記されている。「正義感や公正さを重んずる心、自らを律しつつ他人と協調し、他人を思いやる心、人権を尊重する心、自然を愛する心などの豊かな人間性を培うこと。」の重要性が強調されている。答申から19年の時を経て、子どもを取り巻く環境が複雑かつ深刻になっている今、特に「心の育ち」をどう行えばよいのか。実践的な策が改めて必要ではないか

---

\* のぐち ちえよ：大阪国際大学短期大学部准教授（2017. 9. 20 受理）

と考える。

そんな中、わらべうたあそびはまさに「心の育ち」を含め多面的な発達を促す優れた教材であることは先行研究からもあきらかにされてきた。本来家庭や地域で伝承されてきたはずの「わらべうたあそび」は子どもを取り巻く環境の変化に伴い、自然伝承だけに任せておけない危機感を抱く。安全な場所と仲間と「あそび」の担い手が存在する子どもの教育・保育現場においては、「こども文化」の継承を果たす役割を担っていると思うが、実際はどうであろうか。その疑問から教育現場でアンケート調査を行い、わらべうたあそびがどのように実践され、継承されているのかについて焦点を当てて考えてみた。

## 第I章 わらべうたの研究について

### 第1節 現状

子どもをとりまく環境は、家庭においては「育児放棄」「幼児虐待」、学校においては「いじめ」「不登校」など大きな社会問題となっている。近年の社会環境の変化は、子ども同士の触れ合いの機会の減少、子どもに対する「過保護」「過干渉」、あるいは子育てについての経験や知恵の伝承の減少をまねき、これらは保護者の育児不安をこえて、子どもの「心の育ち」への影響を危惧する。

「心の育ち」の為には、本来子どもには、遊びを通して生きるために必要なことを自然に獲得するような時間や空間や人間関係が保障されなければならない。子ども達には今どのような体験が欠如しているのか。保育環境でいえば、待機児解消施策として設置基準が一時的に緩和され、園庭が一定基準を満たさなくても近隣に代替地がある場合開園ができる。園内にある園庭で思いっきり走り回る環境を整えたいのはもちろんであるが致し方ないことではある。

では、家庭でどれほど子育てに良い環境が整えられているのであろうか。それぞれ状況が違うため一概には言えないが、目や耳からはいる情報に関しては、子どもの周りには、閃光な映像や大きな音量があふれている。また、大人の手元からはスマートフォンが片時も離れず、子どもがむずかると大人が肉声であやすのではなく、その端末装置をあてがわれ、そこから流れる音と映像で機嫌がよくなる。幼子が小さな画面を自ら器用に操作し、お気に入りの映像を見入る場面に遭遇する時がある。弊害ばかりを危惧するわけではないが、人とのふれあいが欠如すると、心が感じる感度も鈍化し、いびつになると想像する。

今できる「心の育ち」に焦点を当てると、人の声を聴くこと、人との肌の触れ合いによって心を通わせることができる遊びは、家庭で、あるいは幼児教育・保育の現場での原点である。わらべうたあそびは本来そのような役割を果たすものであると考える。わらべうたあそびは今こそ求められている「心の育ち」を育むことができるものである。幼児教育・保育現場でぜひとも「心の教育」をどう図っていくか再構築していきたい。

しかし、今の幼児教育・保育現場では、そのわらべうたあそびを知らない世代が保育者として働いている。わらべうたあそびが伝承されておらず、継承される環境にないことに危機感を覚える。わらべうたあそびが、「心の育ち」に重要であり、五領域にわたる多面的

な教育力を有していることから、保育・教育課程に係るわらべうたあそびとして意識して実践することを図っていくべきではないかと考える。

## 第2節 わらべうたの先行研究

わらべうたを用いた教育運動、保育実践運動の歴史は1960年代以降に繰り広げられたものであったとされる。地域での子どもが主体的な活動による子ども文化から、教育・保育施設での学びの文化に変化していく時代があった。それらのわらべうたに関する研究については、すでに多くの研究者が研究発表をしている。幼稚園教育要領の五領域の一つである「表現」は、音楽や身体表現や造形などの活動を通して行われる。中でも、音楽によって幼児の情緒は豊かなものになり安定するとともに、知的な発達や語彙数の獲得や身体機能、運動機能の発達を促し、社会性の発達にも寄与する。コダーイ・ゾルターン（1882 - 1967 ハンガリー）<sup>1)</sup>は、教育に関する論文で「保育園における音楽」（1941）の中で幼児期（3歳～7歳）の音楽教育が重要であると述べ、わらべうたを活用している。羽生と、コダーイ芸術研究所<sup>2)</sup>は、伝承されているわらべうたを音楽的課題として組織化しようとしてきた。鈴木と東京保育問題研究会音楽部会<sup>3)</sup>は、わらべうたを仲間作りの中で共有されていく媒介物と考えてきた。竹下<sup>4)</sup>は、羽生と鈴木の研究について「前者は指導内容の計画性、総合的な教授を意図しているという点で音楽教育の陶冶的側面が強調されており、後者は、わらべうたは人間関係の中で機能し、その中で集団と個との高まりをねらおうとしている点で、音楽教育の訓育的側面が強調させている。」としている。秋山<sup>5)</sup>は、「わらべうたは、子どもの内面から生きた感情をひき出す。わらべうたの中で、子どもは自分自身を好きになり、他者への心配りが出来るようになる。すなわち、自己を認識し、他者をも認識する事が出来るようになる。わらべうたは調和のとれた人格の形成に寄与する教材なのである。」とし、その教育力を実感している。また、大森<sup>6)</sup>は、「わらべうたの中で自然に他者の身体の一部と触れ合う行動は、心の安らぎを与え、他者への親近感を生み出す。即ち、身体に触れ合いは心の触れ合いを導く。わらべうたで遊ぶことによって、子どもたちは人とかかわりをスムーズに運ぶ力や雰囲気を生み出す力を育成する。その他わらべうたには集団で遊ぶものも多くあり、知的理解を必要とする。ルールの遵守や判断力、公正、正義、道徳性なども育成される。」と述べている。尾見<sup>7)</sup>は、「幼児教育におけるわらべうたの教育的意義についての諸説から、わらべうたが子どもの人間的発達に及ぼす多面的な教育力を有している。」と考察している。また、荒井<sup>8)</sup>は、「わらべうたが子どもの多面的な発達（身体的、知的、情緒的、美的、倫理的）を促す優れた教材であることを、実践を通して明らかにしてきた。」としている。和田は<sup>9)</sup>、「保育実践において今日までわらべうたを用いた実践が熱心につづけられているのは、学校音楽教育の文字言語による教授・学習ではなく、保育者も子どもと遊びを共にし、相互のコミュニケーションによって遊びが展開されるからであろう。」としている。学校教育でのわらべうたについては、小島<sup>10)</sup>は、学校教育でわらべうたを扱う方法論がなかなか確立しない要因として「遊び」と「学び」の連続性と教材としてのわらべうたの発展性の問題を指摘し、その中で全人的な教育的意義や音楽教育としての意義を挙げている。

臨床心理学の面からは、森<sup>11)</sup>は、子どもの遊びに関する現状やわらべうたあそびによって得られる4種類のセラピー効果を挙げ、音楽療法・舞踏療法・手当療法・遊戯療法、それぞれの効果を記している。結果として「わらべうたあそびは心身の発達や心身機能の回復に有効であり、対人関係を潤滑にし、リラクゼーションやストレス緩和の効果が見込まれる」としている。学校教育の場で実践価値のある遊戯療法であると結論づけている。

### 第3節 本論文の課題と方向

これらの先行研究から、わらべうたあそびの教育的意義は十分にあり保育内容「表現」のみにとどまらず、五領域全般多岐にわたる。わらべうたあそびは、子どもが主体的に活動できる学びを導き、それゆえに保育・教育課程に係るわらべうた遊びを意識して保育実践が行われるためにはどのように方向づけていけばよいかを考察する。

## 第2章 調査方法

### 第1節 調査目的と仮説

#### 1. 調査目的

本研究の目的は、幼保連携型認定こども園においてわらべうたあそびの研修会を行った際、保育教諭の認知度・実施度に着目し、実際にどのようにわらべうたあそびが位置づけられ意識して実施されているのかの調査を行った。

### 第2節 調査と方法

#### 1. 調査について

本調査は、幼保連携型認定こども園の職員対象にわらべうたあそび講習会を未満児向け2回、以上児向け2回の計4回実施した。その参加者全員を対象に終了後アンケート調査を行った。その後、3名の保育教諭に1年を経てわらべうた遊びの実践状況をインタビュー形式で聞いてみた。

#### 2. 調査対象と調査内容

##### (1) 調査対象

調査対象は、大阪府M市にある幼保連携型認定こども園3か所の職員43名である。述べ99名の参加があり、1講義あたりの平均参加者は24名だった。

##### (2) 調査内容

アンケート内容は、研修でのわらべうたあそびを知っていたか、また実施しているか、わらべうたあそびのイメージや難しいところ、わらべうたあそびも含めてゆったりとした気持ちで保育しているかなどの回答を求めた。また、自由記述でわらべうたあそびのそれまでのイメージや自分自身の保育を振り返ってみての意見をまとめた。質問項目については、資料アンケート調査用紙を参照していただきたい。

##### (3) 倫理的配慮

アンケート調査は本人の承諾を得て無記名で行い、個人が特定されることが無い

わらべうたあそびの教育的意義からの一考察—保育・教育課程と継承の関係性から—

よう配慮した。

わらべうた研修アンケート

平成 28 年 7 月 吉日

お仕事が終わってからの研修参加お疲れ様でした。研修の感想を研究のデータとして取り入れたいと思いますアンケートをお願いいたします。答えるのは自由です。無記名で個人・園名も特定されないよう配慮します。ご協力よろしくをお願いいたします。 大阪国際大学短期大学部 幼児保育学科 野口 知英代

1、あなたについてお聞かせください。(○をつけてください)

- (1) 研修には、何回出席しましたか？ 1回 ・ 2回 ・ 3回 ・ 4回
- (2) あなたの年齢は？ 20歳代 ・ 30歳代 ・ 40歳代 ・ 50歳代 ・ 60歳代
- (3) あなたの保育現場歴は？
- ・ 1年未満
  - ・ 1年～3年未満
  - ・ 3年～5年未満
  - ・ 5年～10年未満
  - ・ 10年～20年未満
  - ・ 20年～30年未満
  - ・ 30年以上

2、わらべうたについてお聞かせください。

- (1) 研修で習ったわらべうたを知っていましたか？
- ・ 初めて知った
  - ・ なんとなく聞いたことはあったが、したことはない
  - ・ いくつかは知っていて、すこし遊んでいる
  - ・ よく知っていて遊んでいる
- ( 5 曲以下知っている ・ 5 曲以上知っている ) ( 曲以上知っている )
- (2) わらべうたで鼓動と拍が大事だと教わりました。その事を研修で感じることができましたか？
- ・ まったくわからない
  - ・ なんとなくわかった
  - ・ よくわかった
- (3) わらべうたのイメージを簡単にお聞かせください。

[

- (4) わらべうたは難しかったですか？ また難しいところはどこだと思いましたか？

・ 難しいとは思わない

・ 難しかった

理由→ ( )

- (5) わらべうたは一人ひとりを大事にし、色々な感情を育てることとゆったりとした気持ちや歌声で接することを学びました。それはわらべうた以外でも保育全般で大切な姿勢です。あなたの保育を振り返ってできていますか？どちらかに○をしてください。

・ できている

・ できていない → では、どんなところが反省点ですか？

[

- (6) どのわらべうたが好きですか。子どもと一緒にしたいと思ったもの等複数あげてください。

[

以上です。ご協力ありがとうございました。

### 第3章 調査結果

図1は、《研修の参加回数》の割合である。〈2回参加者〉が多く44%（19人）ついで〈1回参加者〉が21%（9人）、〈4回参加者〉が19%（8人）、〈3回参加者〉が16%（7人）であった。図2は、《受講者の年齢》である。〈20歳〉が多く40%（17名）、〈30歳代〉が37%（16名）〈40歳代〉が14%（6名）〈50歳代〉が7%（3人）〈60歳代〉が2%（1名）であった。

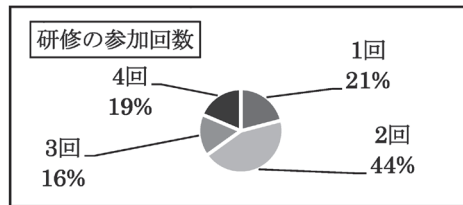


図1 研修の参加回数

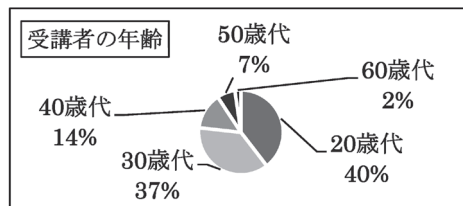


図2 研修の参加回数

図3は、《保育現場での勤続年数》を示している。一番多いのが保育者歴〈10年から20年〉で42%（18人）、続いて〈5年から10年〉が28%（12人）、〈1年～3年〉が14%（6人）〈1年未満〉が11%（5人）、〈20年から30年〉は5%（2人）、〈3年から5年〉は0人であった。

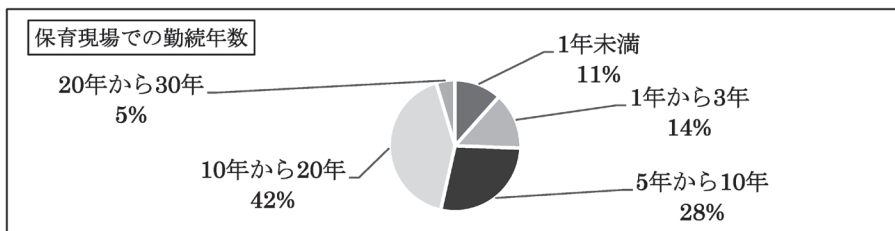


図3 保育現場での勤続年数

図4は、講義内容の《わらべうたあそびを知っていたか》と認知度を確認した。〈いくつか知っていておこなっている〉が21人（48%）で、〈今回初めて知った〉が14人（32%）、〈なんとなく聞いたことはあるがしたことはない〉が8人（18%）だった。〈よく知っていて遊んでいる〉は0人（0%）だった。

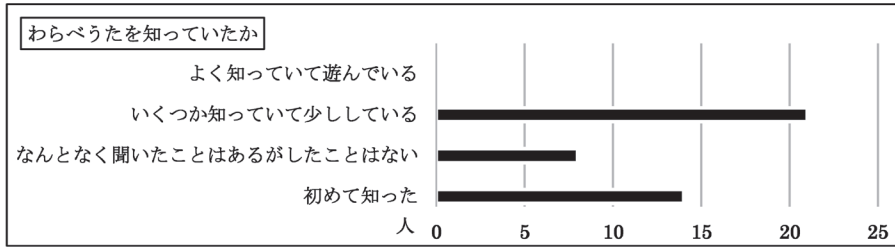


図4 わらべうたあそびを知っていたか

図5は、《わらべうたあそびの認識度》を年齢別に表した。図5-1は、〈初めて知った年代別〉で〈20歳代〉が6人で年代別数の35%に当たる。〈30歳代〉が5人（31%）で、〈40歳・50歳・60歳代〉が各1人で40歳代16%、50歳代33%、60歳代100%だった。

図5-2は、〈なんとなく聞いたことはあるがしたことはない〉の図で〈20歳代〉が5人（29%）、〈30歳・40歳・50歳代〉が各1人で、30歳代6%、40歳代16%、50歳代33%だった。図5-3は、〈5個以下は知っていて少し遊んでいる〉で、一番よく遊んでいる年代は、〈30歳代〉で10人（62%）、次に〈20歳代〉で6人（35%）、〈40歳代〉が4人（66%）〈50歳代〉が1人（33%）だった。

図5-4は図5-1と図5-2を合わせて《わらべうたで遊んでいない年齢別》人数をグラフで表したものである。

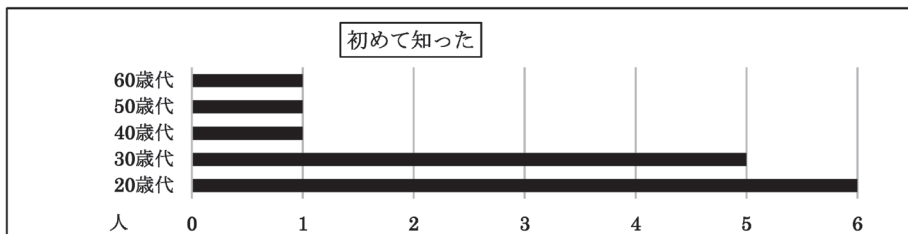


図5-1 わらべうたあそびの認識度  
《初めて知った》(年齢別)

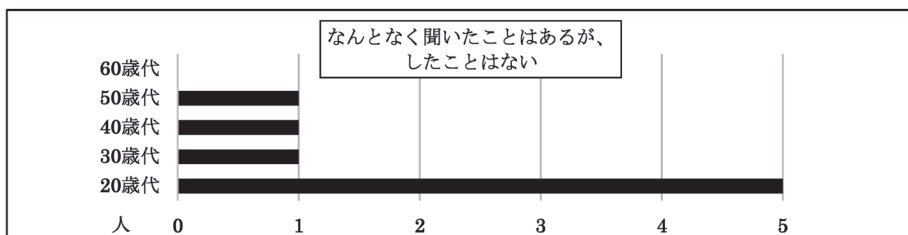


図5-2 わらべうたあそびの認識度  
《なんとなく聞いたことはあるがしたことはない》(年齢別)

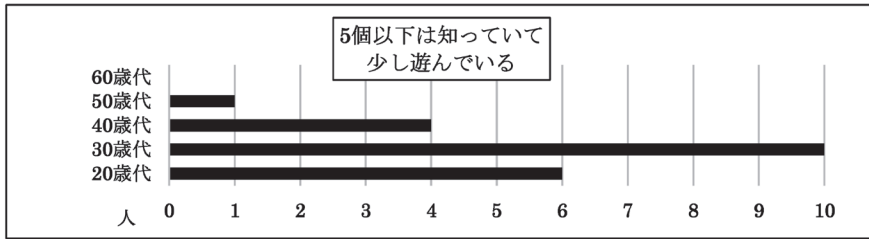


図5-3 わらべうたあそびの認知度  
《5個以下は知っていて少し遊んでいる》(年齢別)

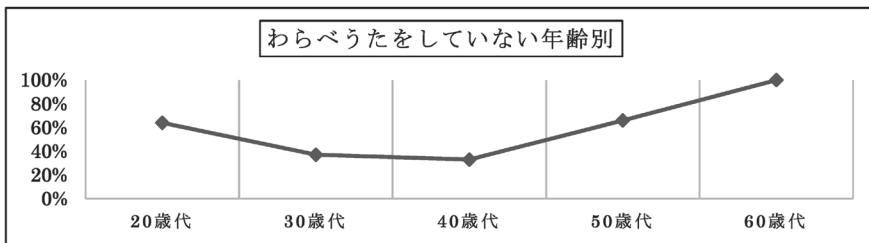


図5-4 わらべうたあそびの認知度  
《わらべうたで遊んでいない》(年齢別)

次に図6は、《わらべうたの認知度》を勤続年数で比較した図である。図6-1は、〈初めて知った勤続年数別〉で〈5年～10年〉が5人で勤続年数人数の45%に当たる、〈10年～20年〉が5人(27%)、〈1年～3年〉が3人(50%)、〈1年未満〉は1人(20%)だった。図6-2は、〈なんとなく聞いたことはあるがしたことはない〉の図で、〈1年未満〉が3人で勤続年数人数の60%に当たる。〈1年から3年〉は2人(33%)〈5年から10年〉2人(16%)、〈10年から20年〉1人〈20年から30年〉1人おのおの(50%)だった。図6-3は〈5曲以下知っていて少し遊んでいる〉の図である。〈10年から20年〉が12人(66%)〈5年から10年〉5人(45%)、〈1年から3年〉2人(40%)、〈1年未満〉1人(20%)〈20年～30年〉1人(20%)だった。

図6-1と図6-2を合わせて《わらべうたで遊んでいない勤続年数別》人数をグラフで示すと図6-4になる。勤続年数〈10年～20年〉6人で同年代の33%に当たる。〈5年～10年〉は6人(54%)、〈1年未満〉4人(80%)、〈1年～3年〉5人(83%)〈20年から30年〉は1人(50%)であった。



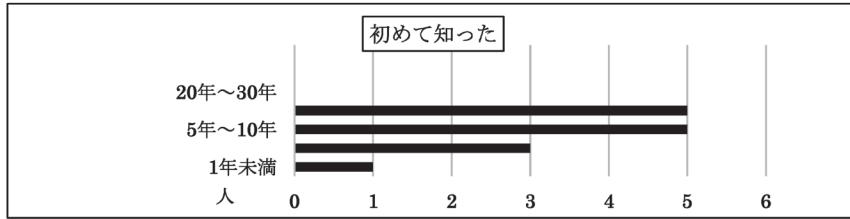


図6-1 わらべうたの認知度  
《初めて知った》(勤続年数別)

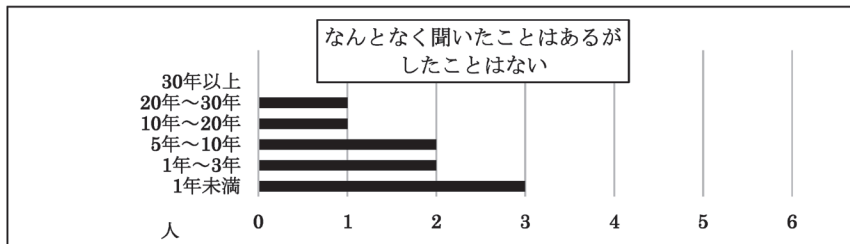


図6-2 わらべうたの認知度  
《なんとなく聞いたことはあるがしたことはない》(勤続年数別)

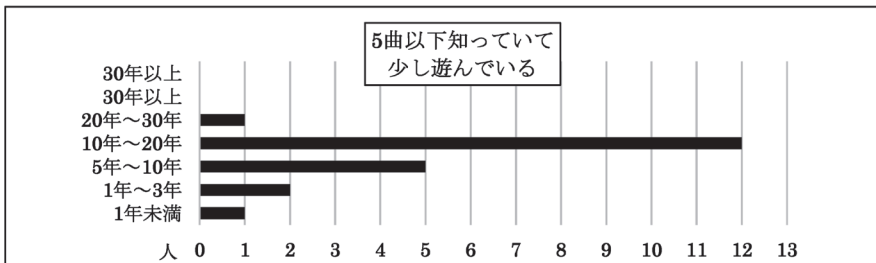


図6-3 わらべうたの認知度  
《5曲以下知っていて少し遊んでいる》(勤続年数別)

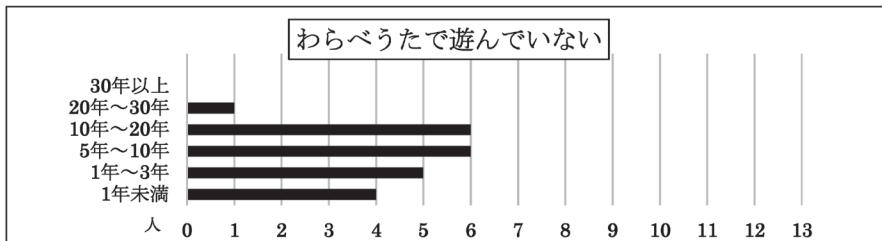


図6-4 わらべうたの認知度  
《わらべうたで遊んでいない》(勤続年数別)

図7は、全体のわらべうたあそびの実施状況の比較図である。〈5曲以下のわらべうたで遊んでいる〉は21人（49%）、〈わらべうたで遊んでいない〉は22人（51%）であった。

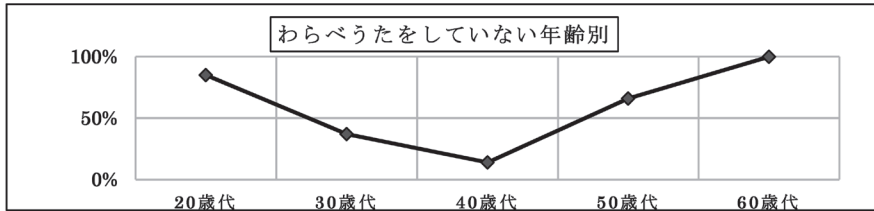


図7 わらべうた遊びの実施状況

図8は、《わらべうたあそびをしていない》を率で比較したものである。図8-1は「年齢別」の比較で、図8-2は「勤続年数別」の比較である。

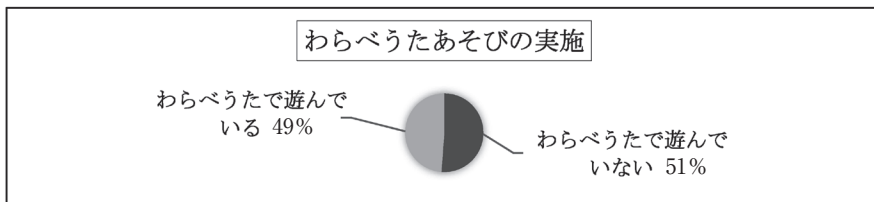


図8-1 わらべうたをしていない（年齢別）

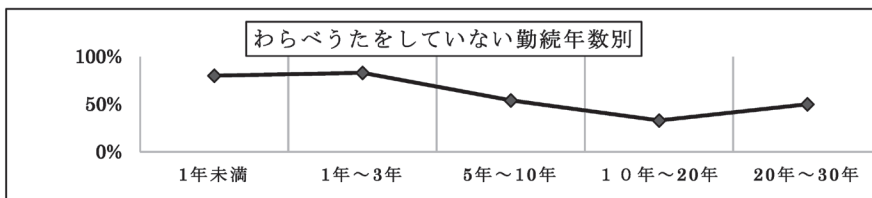


図8-2 わらべうたをしていない（勤続年数別）

次に、わらべうたあそびのイメージはどのようなものかについての意見をまとめた。心地良いリズム感、心穏やかになる、ゆったりとしているなどの意見が多く上がった。また、1対1で関わることから、大人数でも取り組める幅広い遊びであり、子どもが無理なく取り組めるものであるという意見も多かった。

形式としては、

- (1) 昔からうたわれている。自然に覚えて簡単である。
- (2) 種類がたくさんある。
- (3) ルールが身につく。

- (4) 何度も繰り返す楽しさがある。
- (5) 何も道具がなくても遊べる。
- (6) 心地良いリズム感。

行動としては

- (1) 輪になる。手をつなぐ。
- (2) 身体の部位に触れる。
- (3) 少人数で遊ぶ。
- (4) 1対1で触れ合う。
- (5) 追いかける。
- (6) 連なって歩く。
- (7) 大人数でも遊べる。

心情としては

- (1) 心が穏やかになる。心地良い。
- (2) どこか懐かしい。
- (3) 優しい。
- (4) ゆったりとしている。
- (5) 信頼関係が深まる。
- (6) 少し怖い歌詞もある。
- (7) 安心する。
- (8) あたたかい心の期待感。
- (9) 子どもの喜び。楽しさ。

わらべうたあそびは一人ひとりを大事にし、色々な感情を育てゆったりとした気持ちや歌声で接することを学んだことを受け、自分の保育を振り返り保育全般でも大切な保育の姿勢を心がけているかを聞いてみた。結果は〈できている〉21人(49%)、〈できていない〉22人(51%)で同数であった。〈できていない〉の中での反省点として挙がっていた意見を表1に記した。

表1 わらべうた研修を受けての保育での反省点

保育の反省点	行事に追われて余裕がない 何を育てるかより、活動をどう行うかに重点を置いていた 楽しみながらうたうことに欠けていた 歌声に意識がない 急いで行動していた 時間を気にする 幼児でも触れ合いが大切と思った 一人ひとりに向き合っていなかった 自分の保育にむらがある 感情豊かに育てるという意識がなかった うたう歌のテンポが速い 落ち着かない保育をしている 自分の声が大きすぎる 悔しさがまんなどの色々な感情を育てていない
--------	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

自分の保育をあらためて振り返り、余裕がなく急いで行動し落ち着かない保育をしていたとの反省が挙がる。また、歌声や歌うテンポや声の大きさにも気づき、何を育てるのか、どういう感情を育てていくのかにも着目している意見もあった。

また、1年後の実施状況をインタビュー形式で尋ねてみた。対象者は、わらべうた研修を受けた3名である。研修後0歳児から1歳児、フリーから2歳児、5歳児から3歳児クラス担当となった3名で、回答はほぼ同一の内容となった。表2に示している。研修後は紙に書いて覚えようとしたり子どもが喜ぶものを繰り返し取り入れている。声のトーンも意識して歌えているが、レパートリーを増やしたり、同僚に継承したりする意識はあまり持っていないようだった。カリキュラムにわらべうたの年間計画はないが、研修に参加したい意識は高い。

表2 わらべうた研修を受けたあとの取り組みについて

質問内容	回答
1)、研修後実践したか	実践した
2)、ではどのように実践したか	覚えるまで紙に書いて繰り返し行った 土曜日保育時縦割りで楽しめた 声のトーンは意識した 布を使ったものを子どもが喜んでいる
3)、では、現在実践できているか	覚えたいくつかは繰り返しできている 子ども自身がうたいだす姿をほほえましく見 ている 声のトーンは今も意識できている
4)、研修後すぐの時と比較して数や回数が増えているか	覚えていない歌は実践できていない 数を増やすことは難しい
5)、複数担任で、わらべうたを知らない同僚に伝えることはできているか	歌って遊んでいるところを見せている 継承することは意識できていない
6)、保育・教育課程やカリキュラム、あるいはわらべうたの年間計画はあるか	ふれあい遊びは週案に組み込んでいる わらべうたの年間計画等はない
7)、今後自分のレパートリーを増やしたいと思うか	覚えたいと思う 研修があれば参加したい

#### 第4章 総合考察と今後の課題

ここでは総合的な観点から考察する。はじめに述べたように先行研究からもわかるように、わらべうたあそびの教育的意義は、保育内容「表現」のみにとどまらず、五領域全般多岐にわたる。わらべうたあそびが子どもの主体的活動の学びを導き、教育・保育課程に係るわらべうたあそびを意識して保育実践が行われるためにどのように方向づけていけばよいのか。社会的背景として少子化、核家族化、情報化、都市化による環境の変化から、家庭や地域ではマスメディアの影響により、戸外遊びや集団遊びの機会が少なくなっている。幼児の実態として、明るく活発な子どもは多いが、進んで子どもと関わろうとしなかったり、自分の気持ちを伝えることを苦手だったりする子が増えているように思われる。保育者は人と関わる力を育てるにはどうしたらよいか模索しているところであろう。したがって保育現場でのわらべうたあそびの実践は非常に重要である。

アンケート調査を分析すると、アンケート対象者は、「20歳代」と「30歳代」が多く全

体の77%を占めている。その年代でわらべうたを〈初めて知った〉、あるいは〈なんとなく聞いたことはあるがしたことはない〉は、合計で17人であった。全体の39%の保育者がわらべうたを実施していないことになる。勤続年数では「10年から20年」の経験者が42%と多く占めている。では、その「10年から20年」の経験者で〈初めて知った〉、あるいは〈なんとなく聞いたことはあるがしたことがない〉は、6人で同年勤続年数33%に当たる。10年から20年の間、子どもたちとわらべうたを通して触れ合っただけでこなかったという結果だ。彼らとペアを組んだ保育者は、当然わらべうたの継承・伝承はなされていないことになる。新任保育者とベテランと呼ばれるこの年代の保育者が同クラスの担当になることも多いと思うが、新任保育者にまったく継承されないのはこの先のわらべうたあそびの存続が危ぶまれるといっても過言ではない。勤続年数「5年から10年」の場合でも、〈初めて知った〉あるいは〈なんとなく聞いたことはあるがしたことはない〉が6人で、同勤続年数の54%が実施してこなかったとなる。

筆者の予想では、新任保育者は養成校での学習でしか機会がなく、認知度も低いと考えていた。したがって、勤続年数もそれに比例し、認知の度合いも上がり、知らないという推移は右肩下がりになるであろうと思っていたが違っていた。このことは、わらべうたを知るあるいは学べる機会が持たかどうかが大きな要因であろうと思う。今回はコダーイのわらべうたを中心に研修を行い、研修実施後、そのコダーイやマザー・グースの内容について尋ねたため〈初めて知った〉〈なんとなく聞いたことはあるがしたことはない〉となった。保育者自身が経験した、あるいは昔ながら受け継がれている「なべなべそこぬけ」や「かごめかごめ」などは当然実践されている。今回研修で行ったコダーイやマザー・グースのわらべうたあそびは、保育者として経験を積んだとしても、それらを学ぶ機会がなければ素通りしてしまう。未満児のいる保育現場ではわらべうたあそびの取り組みに力を入れ継続的に行っている園も数多くある。逆に幼稚園から、幼保連携型認定こども園に移行した園は、特に乳児期に対してのわらべうたあそびは、知識として意識して習得しなければ実践が難しいと予想する。よって、わらべうたあそびを実施しているか、実施していないかはこども園の中でも当然温度差がある。

筆者は保育現場に在籍していた頃に、コダーイを中心にわらべうたあそびを子どもたちと実践してきた。小林<sup>11)</sup>が言うように、人との関係づくりと優しくうたうことの魅力を感じてきたところである。アンケート調査から、保育教諭のわらべうたあそびのイメージは心穏やかにゆったり触れ合えるものとして以下の教育的意義と子どもの発達にもたらす影響力を感じとっていた。わらべうたは言葉、音楽、動きなど遊びの主体となったものであるから、おのおのの発達を同時に促す。乳児期は1対1の触れ合いが多くあるが、2歳以上になってくるとゲームの要素に富み、個人でも遊べるが、そのほとんどは、グループでの活動である。わらべうたで遊ぶことを通して、方向感覚（前後、左右）や、序数、数量、計数、比較などの数学的認知能力を培う。意見を出し合い、協力して勝つために工夫をする。思いやりや共感的態度で仲間と共に遊び社会性を養う。ルールを理解し、お互い守りながら楽しむ。また、ルールを守れないと遊ぶ事ができない事を知る。ルールに不具合が生じると、子どもたちでルールを変更する工夫がなされる。鬼遊びでは、鬼になることで

仲間からの一種の疎外感を感じながら役を演じ、役割を果たせば再び仲間に戻る経験をする。これらの経験は、幼児の道徳性の発達に非常に大きな影響をもたらすであろう。わらべうたあそびは、知的な面を持ちつつ、瞬時に状況を判断して行動することを要求される。そのため、スリルに富み幼児の興味を深めていく。何回も繰り返して遊び方も発展させ、工夫を重ねていくことができる。身体を使って遊ぶことから、運動機能も発達させていく。知的な理解も動きを伴う事で、より理解しやすいと言える。

アンケート調査の表1は、保育者が自身の保育を振り返り、51%（22人）から反省点があるが、わらべうたを通して自分の保育の在り方に気づき、子どもの姿を通して反省すべき点を見出している。保育者としてわらべうたあそびを習得するということは、一人ひとりを大切にすることの意味を、自らの保育から考え見直すという保育の向上にもつながる。よってこの多様な教育的要素を持つわらべうたを保育の現場でより多く活用すべきであると考え。しかし、わらべうたが保育・教育課程や年間指導計画に挙げられていないことはインタビューの結果から、それほど重視して位置づけられ活用されていないと読み取れる。保育・教育課程の中でわらべうたがしっかりと位置づけられ、五領域を統合して経験していける教育的意義を保育現場で保育者が確信し、年間指導計画の中に組み込まれ実践され保育者間で継承していくプロセスを構築していかなければならない。また、知ることから始めるためには研修と自己研鑽が不可欠である。そして、保育者自身が自分のものにするためには繰り返し遊び、保育の実践から分析し考察を重ねていくべきである。保育者から子どもへ、保育者から保護者へ、保護者からこどもへという橋渡しを継続的に行うことにより、衰退していくことなく、あるいは未実施のまま素通りしていくことなく後世に受け継がれていけるであろう。地域の子育て支援の場でもわらべうたあそびは実施されているが地域差が大きく、回数を重ねないとなかなか継続にはつながらない。ぜひとも継承されていくべき内容として保育・教育課程、指導計画に組み込み子育て支援の年間の取り組みとして活動していくべきであると考え。

平成29年3月に幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領が告示され3つの施設において重視することが統一された。「環境を通して行う」ことを基本原則とし、生きる力の基礎を育むための資質、能力を育むことや「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を明確にして取り組むこと、小学校教育との接続をより円滑にすることが掲げられている。幼保連携型認定こども園教育・保育過程の領域「環境」においても2内容の(4)に「文化や伝統に親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたやわが国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること」とされている。まさに、わらべうたを継続的に遊びに取り入れていくべき指針が記されている。計画的に保育の中に取り入れ、わらべうた遊びを経験し育んでいくこと、そのことによって保育者の質の向上も図られていくであろう。

今後の課題として、今回研修及び実態調査をお願いした園のその後の取り組みを継続して調査し、保育・教育課程に組み込んで実施年間計画をたて、わらべうたあそびがより充実した取り組みとして構築されるよう見極めたい。

謝辞

本論文の作成にあたり、お忙しい中アンケート調査にご協力いただいた幼保連携型認定こども園の皆様には心より感謝申し上げます。

参考・引用文献

- 文部科学省告示第26号「幼稚園教育要領」フレーベル館2008  
厚生労働省告示第141号「保育所保育指針」フレーベル館2008  
文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」2014  
文部科学省・厚生労働省「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」2017  
コダーイ芸術教育研究所「いっしょにあそぼうわらべうた—0.1.2歳児クラス編」200年19版刊  
コダーイ芸術教育研究所「いっしょにあそぼうわらべうた—3.4歳児クラス編」2007年14版刊  
コダーイ芸術教育研究所「いっしょにあそぼうわらべうた—5歳児クラス編」2007年11版刊  
(1) コダーイ・ゾルターン、中川弘一郎訳1980(年)「コダーイ・ゾルターンの教育思想と実践」全音楽出版社1980. p152-163  
(2) 羽生 協子 コダーイ芸術研究所(1975年)「保育園・幼稚園の音楽—わらべうたの指導—」1975 明治図書 pp.77-81  
(3) 鈴木 敏朗(1975年) 東京保育問題研究会音楽部会 「伝え合いの音楽教育」1975 いかだ社 pp.12-16  
(4) 竹下 英二(1983年) 「わらべうた遊びによる拍の指導」福島大学教育実践研究紀要第4号 1983. pp.79-100  
(5) 秋山 浩子(2000年)「子どもの感情の発達を促すわらべうた」 保育学会大会発表論文(53) pp.716-717  
(6) 大森 隆子(2000年) 保育学会大会発表論文(53) S35. 2000. pp.4-28  
(7) 尾見 敦子(2001年)「幼児教育におけるわらべうたの教育的意義」川村学園女子大学研究紀2001. 12-2 .pp.69-92  
(8) 荒井 映子・秋山 浩子(2007年)「子どもの多面的発達を促すわらべうた<3>—幼児期の芸術教育の観点から— 日本保育学会大会発表論文集(56) 936-937. 2007. pp.5-17  
(9) 和田 幸子(2008年) <研究ノート>「わらべうたを用いた保育実践の現状と課題—わらべうた講師へのインタビューから」生活科学研究誌・Vol.7(2008)《人間福祉分野》  
(10) 小島 律子(2009年) 学校音楽教育におけるわらべうたの再考—「教材」としてのわらべうたから「経験」としてのわらべうたへ— 大阪教育大学紀要V. 2009. pp.43-55  
(11) 森 明日佳(2012年)「遊戯療法としてのわらべうた」アライアント国際大学カリフォルニア臨床心理大学院 臨床心理学修士論文2012. 6  
(12) 小林 純子(2006年)「わらべうたの魅力」全国保育問題研究協議会2006. 222号. pp.38.39 「わらべうたあそびには二つの魅力がある。人間関係の発達と、美しい音楽・動きに対する感性を育む。幼稚園ではピアノ伴奏で難しい歌を指導し、大きな声で歌えると「大きな声で歌えた」と評価されていた。しかし、わらべうたを取り入れたことにより遊びながら歌うため子どもの声が柔らかく揃うようになった」としている。